

## 4. ロシア史(2) : ロシア帝国の崩壊

### 4.1. 第1次世界大戦

1908年、オスマン帝国に青年トルコ革命が起こると、これに乗じてブルガリアはオスマン帝国からの独立を宣言、オーストリア=ハンガリーもボスニア=ヘルツェゴヴィナを併合した。この併合は、同地に多くのセルビア人が居住することからセルビアの反発を招き、セルビアはオーストリア=ハンガリーと激しく対立するようになった。1912年、ロシアの指導下に、ギリシア、セルビア、ブルガリア、モンテネグロはバルカン同盟を組織し、オスマン帝国に宣戦し、バルカン半島に残されていたオスマン帝国領の大部分を奪った（第一次バルカン戦争）。この間、アルバニアも1912年に独立し、永世中立国となった。しかし、戦後領土の分割問題から、バルカン同盟の内部で、ブルガリアと、他のギリシア、セルビア、モンテネグロとのあいだに紛争が起こり、オスマン帝国とルーマニアも、ギリシア、セルビア、モンテネグロ側につき、1913年にブルガリアを大敗させた（第二次バルカン戦争）。その結果、バルカン半島におけるロシアの影響力が強まるとともに、ブルガリアとオスマン帝国は、オーストリア=ハンガリーと接近するようになった。

1914年6月28日、オーストリア=ハンガリーの帝位継承者フランツ・フェルディナント夫妻が、ボスニアのサラエヴォで民族主義者のセルビア人青年に暗殺されるという事件が起こり、オーストリア=ハンガリーは、これを機に7月28日、セルビアに宣戦した。ドイツはオーストリア=ハンガリーを支持し、8月1日にロシアおよびフランスに対して宣戦した。翌8月2日、ロシアもドイツに対して宣戦、3日にはフランスが、4日にはイギリスがドイツに宣戦した。6日には、オーストリア=ハンガリーがロシアに宣戦した。

スラブ系のセルビア人がオーストリア=ハンガリー帝国と対立する状況は、スラブ人・正教徒の盟主を自認するロシアを必然的にオーストリア=ハンガリーとの対立に引きずり込んだ。ドイツはオーストリア=ハンガリーを支持していたし、他方で、ロシアの工業資本家はドイツ工業との対抗意識を持っており、地主は穀物輸出をめぐってオスマン帝国とそれを支援するドイツに敵意を持つようになった。こうして第1次世界大戦が始まった。

### 4.2. ロシア帝国の崩壊

1914年に始まった第1次世界大戦でも、依然としてロシアは、日露戦争のときと同じ失敗を繰り返していた。ただし、今度は兵站も長くなく、地の利もロシアにとって不利ではなかったが、それでも決定的な勝利を奪うことが出来ないうちに、1917年に入ると食糧難のために首都で暴動が起こるといった悪いパターンに陥った。しかし、ロシアでは日露戦争のときと決定的に違うことが一つあった。それは、皇帝自らが最前線に立って文字通り陣頭指揮をとっていたことである。最前線は現在のロシアとベラルーシの国境線を越えてベラルーシの首都のミンスク方面に向かって百数十キロ進んだ付近にあるモギリョフという町の郊外で、皇帝ニコライ2世（在位1894-1917年）は、自らこの最前線の町モギリョフに大本営を移し、病弱の一人息子アレクセイを伴って、陣頭指揮にあっていたのである。

イギリスのビクトリア女王の娘がドイツの貴族に嫁入りし、そこで生まれたのがニコライ2世の妻アレクサンドラである。つまりニコライ2世の妻アレクサンドラは、大英帝国最盛期のビクトリア女王の孫娘である。しかし、大英帝国やドイツ帝国との血縁に基づく安定的な関係をもくろんだこの結婚は、ロシア帝国にとって、致命的なものとなった。というのは、このビクトリア女王の孫娘アレクサンドラとのあいだにニコライ2世は4人の王女と一人の王子をもうけたのだが、王子アレクセイは英国王室の血友病の遺伝子を引き継いでしまったからである。男子にしか現れないという血友病は、当時は不治の病とされていた。皇后アレクサンドラは、息子アレクセイの不治の病を癒す祈禱師としてラスプーチンという修道僧を宮廷に出入りさせることになるが、アレクセイの病気は国家機密であったために、国民はラスプーチンのような怪しげな人物が宮廷に出入りするのをいぶかしく思っていた。前線の大本営にいるニコライ2世に代わって首都に残り日常の政治を取り仕切っていたのが、心配性で世間知らずのアレクサンドラだったことは、それだけでもロシアの戦時体制にとって大きなマイナス要因だったが、彼女がラスプーチンの占いに従って政策を実施していたことは事態をいっそう悪化させた。

ニコライ2世が、自ら最前線で陣頭指揮に立ち、妻が国政を仕切るのには、近代国家ではやはり無理がある。政府は、政策に失敗した場合は、総辞職して責任をとる。皇帝が陣頭指揮をとっていて、その戦争に敗北すれば

ば、皇帝は譲位するか、帝政が終焉を迎えるかのどちらかである。

首都で労働者と兵士の反乱が起こったことを知ったニコライ 2 世は、それを鎮圧するために首都に向かおうとしたが、列車がストライキのために身動きができなくなり、弟のミハイルに譲位することで事態を收拾しようとした。しかし、ミハイルは辞退し、1614 年以來のロマノフ王朝はあっけなく崩壊した。

そのあとの主導権は、国会で議院内閣制の導入を主張していた改革派がとり、臨時政府が成立した。この 2 月革命の主体は、労働者と兵士ではない。確かに、首都で労働者と兵士の騒乱が起きていたことは事実だが、本質は、帝政の自壊であり、もともと英国的な立憲君主制を目指していた国会の改革派が、その後の政権を掌握したという、いわば立憲君主制から立憲共和制への移行が事態の本質である。臨時政府は国会内の改革派であった立憲民主党(カデット)、ロシア社会民主労働党、社会主義者ニ革命家党(通称エスエル)を中心に組織された連合政府であり、その目標は新憲法の制定のための憲法制定会議選挙の実施とその招集であった。他方、2 月革命の前後に成立していた工場や企業のストライキ委員会の上部組織であるソヴィエトの主要な担い手もまた、臨時政府に加わっていた社会民主労働党であった。したがって、臨時政府とソヴィエトは協力関係にあって、ソヴィエトは政府の労働社会政策の実施機関であり、労働者の利益の集約の場でもあった。

しかし、臨時政府はやがて国民の、とくに首都の労働者と兵士の支持を失っていった。それは、臨時政府が「革命的祖国防衛主義」のスローガンの下で、戦争を終わらせることができなかったからである。しかし、戦争に敗北した場合、ドイツ軍によってロマノフ王朝の血統による傀儡王政がうち立てられ、ロシア国内の改革派は一掃されてしまうだろうと考えた臨時政府は、戦争に勝利するしかないと考えていた。

しかし、臨時政府にとって致命的だったのは、政府の構成員であるカデットがコルニーロフ将軍の反乱に通じていたと考えられたこと、そのうえ反乱の鎮圧に政府反対派のポリシェヴィキが一定の役割を果たしたために、首都におけるポリシェヴィキの支持者を増やしてしまったことである。ポリシェヴィキは、コルニーロフ反乱の後、首都のソヴィエトで多数派を形成するところまで党勢を拡大することができたため、10 月の武装蜂起、つまりクーデターを決意した。そもそも 1917 年 2 月以前はロシア政界にまったく存在していなかったに等しいポリシェヴィキが、この年のわずか数ヶ月のうちに急速に党勢を拡大することができたのは、この党だけが、即時休戦を唱えていたからである。

しかし、クーデター後に実施された憲法制定議会選挙で第 1 党になれなかったポリシェヴィキは、招集された憲法制定議会を閉鎖した。ロシアの立憲主義はここに潰れたと言える。さらに、即時平和は実行されたが、それはウクライナの独立(実質はドイツへの割譲)というロシア国家の解体をもたらした。しかし、この平和条約はウクライナの農村を基盤とするエスエルの完全なる離反から内戦へと突入する引き金となった。

#### 4.3. ベルサイユ体制

1918 年 11 月、キール軍港の水兵の反乱を機にドイツ革命が起こり、ドイツ皇帝は亡命、ドイツは共和制に移行し、11 月 11 日、連合国とのあいだに休戦協定を結んだ。こうして第 1 次世界大戦は終結した。

1919 年 1 月、連合国はパリで講和会議を開き、6 月 28 日、ドイツとのあいだでベルサイユ条約が調印され、ドイツは、チェコ・スロヴァキア、フランス、ベルギー、ポーランド、リトアニアに領土の一部を割譲した。これに続いて、9 月 10 日、オーストリア=ハンガリーとのあいだでサン・ジェルマン条約が調印され、オーストリア=ハンガリーは、ドイツ人居住地を中心とする小国となったオーストリア、チェコ・スロヴァキア、ハンガリー、ポーランド、セルブ=クロアチア=スロヴェニア王国(1929 年にユーゴスラヴィアと改称)に分割された。これにより、オーストリアは面積・人口が 4 分の 1 に減少した。さらに 11 月 27 日、ブルガリアとのあいだでヌイ条約が調印され、ブルガリアは、マケドニア、エーゲ海沿岸などを失った。1920 年 6 月 4 日には、ハンガリーとのあいだでトリアノン条約が調印され、ハンガリーは、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、チェコ・スロヴァキアに領土を割譲した。これにより、ハンガリーは、面積は 3 分の 1、人口は 5 分の 2 に減少した。さらに、8 月 10 日、オスマン帝国とのあいだでセーブル条約が調印され、オスマン帝国は、欧州側領土はイスタンブール周辺だけとなり、メソポタミア、パレスチナはイギリスの、シリアはフランスの委任統治領となり、キプロスはイギリスに割譲された。

他方、ロシア帝国の崩壊に伴い、エストニア、フィンランド、ポーランド、ラトヴィア、リトアニアは独立を宣言したが、社会主義政権を成立させようとするロシアのポリシェヴィキ政権とのあいだで紛争となり、最あいだでモスクワ条約、8 月 11 日にラトヴィアとのあいだでリガ条約、10 月 14 日にフィンランドとのあいだで

タルトゥ条約、1921年3月18日にポーランドとのあいだでリガ条約を締結し、それぞれの独立を承認した。とくに、この結果、ポーランドは、ロシアから現在のベラルーシとウクライナの一部を獲得し、東欧の大国となったが、このことは、ドイツとロシア（1922年末からソ連）にポーランドに対する潜在的領土要求を抱かせることとなり、第2次世界大戦のきっかけの一つとなったと言える。

こうした第1次世界大戦後に締結された一連の条約によって確定したヨーロッパの体制を、ベルサイユ体制と呼ぶが、ベルサイユ体制下の国境線は、その後、第2次世界大戦後に再び変更されることになる。

